

2024 年度 JANPU 看護実践能力評価基準検討委員会 FD・SD 研修会
質疑応答 (7 月 29 日)

追加説明 松下の三重モデルと従来の KSA との違いが、これからのコンピテンシー基盤型教育に非常に重要な考え方、実践能力になってくると思うが、もう一度、補足説明をお願いしたい。思考力、判断力、表現力が含まれるというところになるのか。

<回答> 松下のコンピテンシー三重モデルに関しては、三つの層があると言われており、知識、スキル、態度、価値観、ここが従来で言われるところの学力論において議論されてきたところであり、古典的な KSA (Knowledge, Skills, Attitudes) モデルやブルームのタキノミーなど、整理も踏まえた上で示されているところになります。これらは、資質能力はそれぞれと重なっています。また、自己との関係、他者との関係、対象世界との関係という三つの関係性でとらえられており、この要求課題に対する行為と、その省察によって、絶えず作り変えられる、つまりは、他者との関係性によって常に変えられていくものだということの説明があります。

実際に、この資質能力を育てるコンピテンシーは具体的な内面だけではなく、他者との関係性、そしてこのコンピテンシーと言われている真ん中にある四角のボックスには思考力、判断力、表現力が含まれていると言われています。21 世紀の学力である知識、スキル、態度、思考、判断、表現、そして主体性、多様性、協働性は、9 つが独立したもので示されてきたというのがこれまでの特徴ですが、21 世紀の認知スキルといったことも考えると、知識、スキル、態度、価値観というのが思考、判断、表現と独立してバラバラになっているのではなく、知識を身につける取捨選択にもスキルにも態度・価値観にも、全て思考、判断、表現が含まれているというのが、このコンピテンシーの三重モデルの特徴になります。

コンピテンシーの表現で何かを説明できるとか理解できるといった時には、あくまでも思考力や判断力や表現力が含まれた上で、説明できるという考え方です。何かの知識を身につけているから実践できるのではなく、思考判断表現が含まれた知識を持つから実践が可能というようなコンピテンシー表現が採用されているのが、こちらのコンピテンシー三重モデルでの特徴と説明できるかと思えます。(第 1 回 FD・SD 研修会資料 参照)

一般社団法人日本看護系大学協議会 2024 年度看護実践能力評価基準検討委員会 FD・SD 研修会【第 1 回目】

3.コンピテンシー基盤型教育とは(コンピテンシーの三重モデル)

コンピテンシー基盤型カリキュラムの考え方

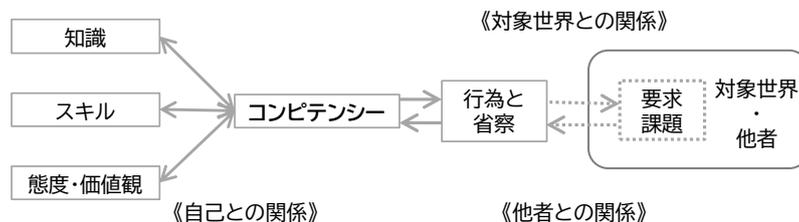


図 コンピテンシーの三重モデル

松下佳代(2021):<センター教員・共同研究論考>教育におけるコンピテンシーとは何か --その本質的特徴と三重モデル--, 京都大学高等教育研究, 27: 84-108

- コンピテンシーの三重モデルは、松下が提案した、教育内容の側面から学力を検討する方法論的側面の強い学力論と、どのような能力を身につけるべきかを主軸において検討する未来志向的な能力論とを統合。
- 三重モデルでのコンピテンシーは「ある要求・課題に対して、内的リソース(知識、スキル、態度・価値観)を結集させつつ、対象世界や他者と関わりながら、行為し省察する能力」と定義される。
- 松下は、思考や判断や表現のためには、知識もスキルも態度・価値観も必要であり、それらを結集して行われるはずであり、「思考力・判断力・表現力」は、三重モデルでいえば 第二の層の狭義の「コンピテンシー」に位置づくものである。

【質問 1】 実は、コンピテンシーの項目の調査があった時に、様々な課題を提案、提示していただいた中で、やはり教員のコンピテンシーもだが、カリキュラムに対する理解が、なかなか十分でなかったりというようなことで、これを今度、今までのコンテンツベースからコンピテンシーベースにしていく時に、非常にそれが障壁になるというお話もありました。また、そのことを解決するために、今回の形 FD・SD 研修会があると思いますが、具体的に私たちが今やっているコンテンツベースのものを、シナジーとさっきおっしゃいましたけれども、つまり、それを否定するものでも全く刷新っていうか、全部なくして全く新たに構築するものでもなく、今やっている教育の中身や、もちろんカリキュラム構成も、そのアウトカム評価についてもコンテンツ、何かをやった、実施した教育したってということだけではなく、どのような能力を学生が習得していったのか。

特に例えば、実習の評価表は、ある意味ではコンピテンシーベースに近いものになりつつあるのではないかと思いますので、そういうものをうまく工夫しながら、すごく膨大なことをやらなきゃいけないという風に思ってしまうと、多分手がつかなくなってしまうので、できるところからってということと、あの実習場所、実習施設との共通理解っていうのも、ある意味ではコンピテンシーってという言葉を持っていくとなかなか難しいので、そういうことを共有していくってところからスタートしていてもいいのかなと、今、思いました。

ブループリントも非常に詳細の内容が書かれておまして、私もなかなか全部を理解することが難しいかなとは思ってるんですが、一部からこつこつ地道にやっていくことによって、全体に向けていくってということと、大学全体がそこまで難しいことなので、まず学部の一つの科目や一つの分野ってところからでもスタートできていけば、これが三年計画ぐらいでコンピテンシー（基盤型教育）に向けていくことができればいいかなと思っています。

もう一点、アウトカムは在学している学生だけではなく卒業生、実際現場で何をできて、あるいはどこに自分たちが不安や不満、不十分なところがあったかなってところも、非常に大事なデータになってくるんじゃないかなと思っています。それをコンピテンシーの形で調査していくってことが今後大事になってくるかと思っています。

<回答> 既にコンピテンシーベースで作られているものも非常に多くあると思う。実際に私の担当する科目自体も、もう既にコンピテンシーベースで作っています。全部を作り変えるというよりは、コンテンツになってしまっているものをコンピテンシーと融合させて作っていくってことになるかと理解しております。今日のスライドでも示した社会的成果というところで、卒業後のアンケートも教育の質保証では求められているところがあります。どのような看護職に育っているのかという卒業終業後時点のことも考えて、カリキュラム全体評価をしていく必要があると理解しておまた、カリキュラム評価のためには、コンピテンシーベースで大学全体、学位プログラム、授業科目レベルを紐づけていく必要があると思います。

【質問 2】 具体的には、どのようにコンテンツ基盤からコンピテンシー基盤に転換したらよいか。カリキュラムの作り方はどのように変えていけばよいでしょうか／変わるのでしょうか？次回のお話しかもしれませんが。

<回答> 次回、具体的に DP をどのような資質能力の固まりで作っていくのかとか、コンピテン

シーベースで表現された到達目標を、どういうふうな学習成果の表現や、どういったツールを使って、各教育機関は検討しなければいけないのかという可能な限り実践例と具体例をお示しさせていただきたいと思っております。

コンピテンシー基盤型教育が、カリキュラムの最終的な評価や有効性の検証といったところにつながるためには、授業科目レベルと学位プログラムレベルといったところの一貫性のあるものが必要になってくるので、一貫性の検証であったりとか、その教育内容をコンピテンシーベースで落とし込んで表現していくためにはどうするのかとか、そういった内容になるかと思えます。

【質問3】 これまでも卒業生像を踏まえたカリキュラムを考えていると思うのですが、それが全体的に出来ていないことを踏まえて、今回の考え方なのでしょうか？

<回答> 私自身も各教育機関様のカリキュラム全部を見させていただいているわけではないので、もちろん、すでにコンピテンシーベースで作られているものや、コンピテンシーに基づくアウトカム設定がなされているものもあると思います。

自己評価点検、IRなどの分析では、実際にはDPに基づいてCPが形成されてないとか、DPに基づいて科目の目標と学修成果まで、一貫性を持った形で作られていないとか、IRデータがDPに基づいたものではないという課題があります。教学マネジメントや自己評価点検といったカリキュラム評価となる教育改善データを示す時に、DPと一貫性を持って、具体的なKPIのようなものを立てて評価するのが非常に難しいという課題です。カリキュラムの有効性を検証をする枠組みは色々あるけれども、その一つとしてコンピテンシー基盤型教育があり、コンピテンシー基盤型教育に基づいて作られたコンピテンシー基盤型カリキュラムというのは、カリキュラム評価に有効な一つの方法論であるというような説明をさせていただいたかと思えます。既に卒業生像に、DPとCPとAPと、そして学習成果といった形で、既に紐付いているということであれば、もうそれはアウトカム基盤かコンピテンシー基盤型教育のカリキュラムになっていたのではないかなという風に思います。

私共もDPに基づいて教育は作っておりますし、シラバスもそれに基づいて、このDPに寄与している科目だということは位置づけている。難しいなと思ったのは、しっかり達成できているのかどうかということのアセスメントプランとアセスメントテストとかと、なかなか紐付いていないというところになるかなと思えます。

これまでの流れを見ても、DP、CP、APとの紐づけとアセスメントテストとプランの紐づけを計画して、教育に落とし込んだというよりは、学修成果の可視化が必要になって学年時到達を作ったとか、それに基づいてアセスメントテストを作ったというような状況であり、全体像の設計の中でそういうデータがあるというよりは、求められたから作ってきたというような後付の作り方のものも非常に多いと思う。テストやプランはあるが、それを紐付けて説明するには、全体を見直したり、一貫性を確認しつつそのテストやプランを使っていく、作って説明するということが必要なかなと思えます。

【質問 4】 今の質問にご回答いただいて非常によく分かりました。本来は卒業制度やディプロマポリシーなどを上げているので、そういったものに基づいてカリキュラムを作らなくてはいけないことは分かっていたが、カリキュラムを見たときに全部がそうっていない。この内容はどこから出てくるんだろうとか、そういう形になってきてしまってる部分だとか、あとは教員があれもこれも教えたいっていうのが盛りだくさんになってしまって、学生は非常に窮屈になってなるばかりで、本来何を教えなくちゃいけなかったのかっていうところをもう一度考えなくちゃいけないなって思っていたところだった。今話を聞いてよく分かりました。カリキュラムを作る時の、本来必要なものについて、もう一度考えていきたいと思いました。

<回答> 私どももいろんな科目とか領域とかで色んなことを教えたいとか、これを分かってほしいということで、盛り込んでいることで、学生にとっては繰り返しになっていたり、あるいは逆に溝に落ちてしまうようなことがあるんじゃないか。だから、体系的にカリキュラムを学生にも示し、我々も合意形成していくってことがすごく大事なのかなと思っていたところです。